山地
見界
鵜飼
教生石
とら教
三

へ13
3940
3

本源

門へ13
3940
3

冊 五
號 墨
函 ち

近江縣物語卷之三

○ひえぎのうひ山ふる

橘乃安世ハ近江の國よりあり世をやをくいらるる。

おりそびぬすびて共數百騎ゐておそひ来られぬひとすじ

のぐしさくんこの八ちうぐとそ妻ゞ手をとりて路もやうき雨を

ふきつけたるぎうひ岩ゝうる。ちてもむすろ菌生ハいろ成

しかひひとのうあるよりうへられしに一定せりたのくしあるう

花乃すぐるをむくつけき山風のがぐひてづれゆき

とおりへむひさきうよ足もずまびさる八雲なるねだも

おれもつりあきほぐしるべしとあきかくましぐるべ

すゝ初りて光くむ出あがゆくへものどうにちぐりちて化も

近江縣物語卷之三

あるべしとあれば伊賀の國よりこんとて安世ぐものしたがへ
なるこの農夫なるべし家ともてたるべしまつりする箱あり
夢ねゆたかくあるくとかくひるにたのもしくうけもたれてゐる
げかひしくあくりてあーいつひるるぞやこれやありてあるべ
ハうきをもなぐちかるこれハさてかたて安世が翔ある常人ハかろ
ぬひびこのせちきたるさけぎに安世ハまぐひこたのわてゐるさき逃
出てあるり逃きい大野まぐらり行るぶたくこる物ひとる
もれくいづくへゆんみもふびんありいるぐせんとにくぐと思ひ
めぐしけるぶいりかく盗人どものとびとりて國ぐまち
あるとは家とたるものいるみしくとせん方なーー今降を
乞るかしが手下となりれるのちーーやりいでんもやをかれ

べーと思ひ定めて ぬんひとぐりの ぬるまりをる前よ行るあ
いぐで出軍勢の内よくいへあハせんいるる奉公ありとこと
つまりりてんといへど盗人どもいるくーー申ぐりにちくバ親ぐ
ろとこるおてゆんとて引つれて幕ーまつーまる陣の
うちへよりひくへいるおるよをるぬすびとの大將ハ調伏九そ
ぬ紙も袴ぐしが股肱とたの紙る賊ぐり常人を見やりて
いいるハ我軍中に定るる例ぐくちぐりて降参のとのハ
ちるべき財をぬすきとりかつ甚ぬりの頭きりりてりて
くべれおきて有りいそぎ此ぐこんの物ぐりめてとまちくバ我
軍中にかれて一卒の業よくまつべーとくいとげとるあ
追出しぬ常人案よまぐひるぐーふとりけてたちいるぬり

臆（おく）めたる男（をとこ）なれば、此（この）ところへきくよりわなゝきふるひて、がたがたと
ぬけつゝ、ぬいびびたびかしこりて、そのまゝ思（おも）ひなやみて、
かしこの松原（まつばら）に往（ゆき）て、ちかく人（ひと）をまちつけて、まづ聲（こゑ）をそ
たつべかなしくて、おのれこそ盗人なりとて、さしもの事いふべかりけれ
おそれて持（もち）たる物（もの）を皆（みな）すて、逃（にげ）ていぬるものぞかれと思ひ
うちかたせて、頭（かしら）より帰（かへ）らんとて、やせかゝりなんとおもふほどに、ふさば
きおけせて、後見参（のちげんざん）に入（いり）べきなれとて、そこらに出（いで）てかへらんと
けふ松原（まつばら）に行（ゆき）て、松（まつ）が根（ね）にありうちかけて居（ゐ）るは、此盗人（このぬすびと）のあとりたち
あるか時（とき）なりしかば、しばらくありて人（ひと）のけはひして見（み）えければ、とし
むかしより、たゞいるほどに、たちまちおもしろき旅人（たびびと）がかしこより
と、ひとりうちきて、ぞいたゞまにまりき、火（ひ）のひかげ見（み）ゆ。はゝ

人こそ来（きた）れ、おのれいかでかと刀（かたな）に手（て）をかけつれど、わなゝわなゝ五體（ごたい）
ふるひ出（いで）て、ふるふ足（あし）ぶみとゞまらねど、念（ねん）じてたゞく
ずくみゐたれば、よくも見（み）えねど、松（まつ）よりも高（たか）くみえ
たるが、大刀（たち）さして、裾（すそ）をつまどりにかゝげて、鶴脛（つるはぎ）のどくしかゆゑ
てくる、ほどのつね人（ひと）とも見（み）えず、おそろしげなるさまにて
そのさまに、聲（こゑ）すべきまゝならねば、ひそかにありしよりぞんご
すれども聲（こゑ）さへいでず、くちもどもりて、せめてものかれんとすれども、そは
聲（こゑ）出（いで）ひいとしく、えうらげなる声（こゑ）して、やおれしく
大將軍（たいしやうぐん）にてあり、わりなくつゞき我（わが）をいたく置（おい）て
くいへ、かの男（をとこ）ちかづき来（き）て、何事（なにごと）いふぞと聲（こゑ）ひ
我耳（わがみゝ）へいらぬぞ、そし旅人（たびびと）にておなすみや、かれ何（なに）てく

柿丸駿河の国
なる法師を
たもつる所

立
立
立

いしてちらすれば、いとゞおそろしくて、青ざめたりたるとゞまりて、
聲をあげて、おれいひとぎなりといふくふしてをる。旅人
見るくなにといふ、ひとぎかりとうちもあるべしなどさハこそ
ぞといへどもおろかれをこゝもでとそおもひ武者ぶりしてふけき人
乃する事ぞといへど、旅人ほうそ笑て、おのれいひとぎのうひ
山ぢなるんこうてれんずとして、力ひきぬきくりあげ
るに、臆心もうせて、のけざまに倒まくふすびあがるべ
ひひよりとあてくるひはく、拜ひとくく、萬物よりひて
腰ぐくもんもむやくなりとて、引ぬとして、身のまづしさの
せんなさかさにぬすくもるあやといへどさんゆくといふ聲も
ものわぶたあをびさてハのハれの事なり今よりむらぐ

つぎとやうて、入道ちて、命つるぎて、ひのしとて、夢人ぐりとり
かいつくくかうて、ろとかしきりひけくおのしよりなるそ。
猶同類のこのりぞこのつるとうに、息きしくいくへまぐくも
あらねば、手をうれて見すしばさて八同類のこのハりしとや。
ちるあそもおのれさぞうのかひかしまてぬひきもそ世をつく
らんと思ひちぬるこそおろかれといひはかを鞭をとまの
てうちもらひはく、ねとりてかくこをちしてで行る夢人
うろろを見送りてだんとそとも腰をびちひとりてのの
樹よすぐりてやうくちぬさてかのりくひそる白骨よ抜ひ
て、思ひるハ人乃頭をとりてこてひつけうしどいそる
物乃手よへるべきすりくひさぐらぬひ人ぐものぐんしてし

而よりかゝるに頭の二三ハ落ちてやわらんそれもろひ
取て歎くべしとて而くわるれて見まそれ人の死
散かゞ有りさかり雲透ようすり見ゆ頭ぞうごろ
びてあるも見ゆ有しらそこと思ひく其内く色つみて
ものきちげて調伏九が陣へとちり行る頃ハ夜明ぐ
ア成て東の空ハくなりて鳥ども鳴つれて飛
ハるく常人陣のうちよ入まバ敵人ども見く親ぐ
くく起出るとりとりそ有よりてとるほどいしあげる
男の鎧ときぐ奥より生きるこ何ぞとこバ有ハ
そのことくよく降参ちるゆ九高名してゞ九あるに
頭をくく持きれバひきで物よ鎧ぬりうとゆてハ

去すゆ一ぬ九ハ鎧一領の内に成てあるゞと思へて
なるに今まのりこちくへとりすすきぎ入く見まバ調伏
九鋪革のくへてねまりめて居ていんに得ものありつるく
うふさんひぐ仰せを承りて九がこの松原へ引てゆひ
うしまり計とゆばゆるちゆひひさまにたち巻とる
りの四人いうゝげよ松りてとりてゆて新をとりけてゆくど
彼等さちとありて弓矢つゞひてまつ先する男のあるやかよ
くぐりハけくを誰と思ハ清和天皇ハ御くまど
六孫王経基の君ハ三代ハのくりて日本垂双の名将とうべ
摂津守源の頼光朝臣のくちよ四天王とよばれつ
の源二綱くうを傍する盗人うちくて源二綱ハ

守護して夜行警衛いとまなければ、ぶはわかれ〳〵に寄べきに、
あるべきいへで常人物ときこえてぜしてぞ給ふ。
その綱ぐ叔母の家よりありて、常つね水くゝ飯しゝ一時賞
手の中間男よ茨木幸人といふ者あり。征矢ひとすぢまゐ
ちんとぞ。雨うよりふちうし見てゐもねどたしうよ重藤の
弓にきりふの矢つぐひするし曇くゝにけてきりくゝしひきた
ぼりひくゝふつと射る矢を菓刀あて、ぢわゝ武者
よむひく。名のるよなどび太刀のきれあぢうけてくゝしまう
うにかざし。ぢてかる。敵もぬきつれきりむしびるかげろ
いなづまの月めにあくれかゝこにらくゝ飛鳥のごとく。
かけめぐりて、ていく働きいへでかるちごとや思ひうんいちあし

出して逃ゆくとあさうく幸人どの。逃しわゝせて勝
負われとこのとについて。追うけつまぶさすぐに取とやひ
りんとうて逃して。ぢてかるをやり過ゝてくゝどきる。炎所
やあうりん。ろめく。取とのつゝり首うき切てゆけどども
三人のやつどゝをうちりゝゆくくちをくゝをゆく。
あゝとちやうにうちかゝりて。こしい寄ひる品ゆくゝ二の
色調伏丸がまへ出セば調伏丸かゝらを色とるおびし
めゝとき。ぢうて。ぢくゝけひてやれとのどもこやつ
くゝりて。拷器ようあげとゝいへでゝくゝとりきてゝ
あゝどとて。常人をくゝりけげつこはいくゝるべき。
あつゝで。なゝどかくいふのゝでゝといへで調伏丸ちろみる

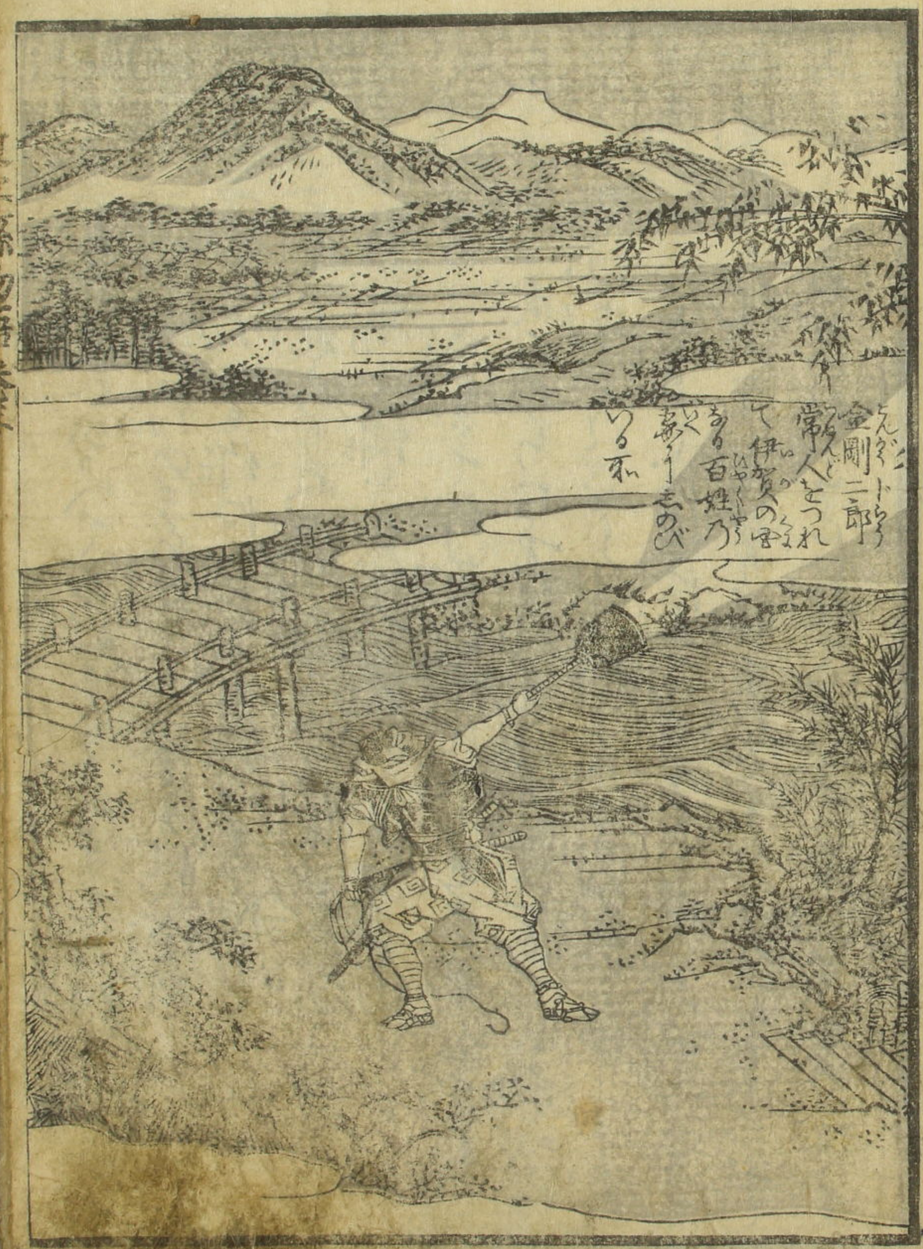
無慙の愚人のるかこれ渡邊が士卒の頭なりやとりひて
足ゐて常人がまへに跳やるとゝ見るに女の頭なりさて
も夜目に見てさぐりてゐるに頭をとりてきるわるし
おりへだきてもいとべたうちゝ面わるくなりて泥ごりしたる
調伏九かさねておのれがぐるひきこまれ物ぐるしてゐるとて
色ひき明てなげやりをうちゝ流れば頭かゝ人の魂し
見るより膽つぶれ例のつかきふるひ出し金剛二郎
きこれてべばむとゝいへて出る人あり見てあるとばべ出ひい
る旅人より金剛二郎うちゝ云ふいるゝ所を忘れ
たるゝ出れのれがくるとて物をとてなけやしうるはその
時きこれ我りしぐりより常人魂うせて生るゝ

せず おのれが剛膽をそうくんとそかくうまへうれしかぞう
膽病づきたるやつとはおりそばげりとて一度よそ
調伏九いひるはとやつゝくのうひやすなかゝ膽とを
きたりるゝうゝのあそれあるとばゝ板風呂
乃水おじゝるまべ 但味方よ入るゝ入れば例のあく
そうくとゝいひておるさへ入ぬ常人ども常人が膽をは
ゝりて針のさきあて懸きうがをえりいきすゝちく
ちてひきいで湯屋のまへにて すゝ九ゝ死るゝいとはぬう
びとのゝさへつきあればゝそる行て人すゝらひと
べきたあゝびゝ見ひて夫ゝり日ごとに ゝの小初ど返て
ゝのさまきつゝちゝいゝあゝちりるとて

○いもがしら

そなたより常人ハぬけくびとぐ陣をとりて湯をたゝせて日を
をくるゝ金剛二郎といふ者いうゐる事にハ常人
ハ世ゐりておのゝ一騎ゐるくぬすまつゝ出るとりくハ必
供ゐ具してゐる紀ゐ金剛ゐる時云ゐるハけゐるとり乃
民どもの財ハ奪ゐるゐのとりゐるくとりゐくしつ今ゐり
いづくへ行て盗せまゐといへど常人いひゐるハ我敵又ゐ
橋安世といふ者伊賀の國ゐるめのとの家ハ底ゆきい
と強りぬかれとり家富る者ゐてゐひつれでゐれ
たゐるゐど今ゐたくをへゐちていをん又かのめのとゐ家も
ゆゐるゐるゐ剛及びていかゐらへゆゐせのハゐん

おのれも其所をとゐく存ゐハゐれどかゐこに至りてひゐ
乃ほど尋ねゐりきゐちゐ家ゐ之ゐる事いはまゐくゐ
といへど金剛ゐてそれゐうべゐハゐくかゐこへゐち
ゐくゐいゐき所得ゐそんとて例のゐとゐ常人を具して
出行ゐ其夜亥過ゐゐ一村ゐ至ゐるに大ゐる門たちて
かゐゐゐに竹の藪垣ゐる家ゐり金剛云ゐハ財ゐりけ
なる家ゐり入て見んとて兄まハしなまハ前ゐ一大ゐりの
ゐりて橋りてゐるハ渡べきやゐゐ金剛ゐ後ゐり
釣のやゐなる物ゐなゐ綱つきたるをゐり出ゐかの竹
投わゐれゐ竹のゐらゐ釣ハかゐゐつきね金剛ゐりゐ
ひきゐすれハ竹ハうゐゐに寄ひゐびくゐゐゐりゐ


金剛二郎
常人をこえて伊賀の国
なる百姓乃
あらーものべ
いる和

竹のうらを手にひくへて、ちいさくつきて入れまいらせ、常人はいまだに竹のうらよりつきそれば、金剛さはそんじまつて、大きく大なる竹にてありそれば、ゆさくとうごかれて、俄かにあるさぶるよ起こりぬ。常人めをうたれて、藪垣の中へおちとり落入りぬ。金剛又綱をこかげて、竹のうらをひきうせこれるすぐて、門のうちへ入ぬ。さて竹藪の中に入て見るに、常人はかえくくと成てうちたまくく息をもせびをりつるを、小吹うけ、ぶ〳〵て、一人出るれば、やう〳〵人びとつきぬ。我まうさびて、其少め弟をうてそとて、ちきに立て、毎屋しおぼしき所をうりて、何事するにうぶ〳〵ちうり、物すしぐ〳〵かるるとぢしやせらうにたのきぬ。おのれいらに待てをしをして、常人をばすのこに置て、たぐ一人奥をちして入ぬ。あぐ〳〵有て、大きなる皮竹籠を持出て、常人がかるうに置て、又奥へ入て、ほどなくして、酒肴などを持来りて、すのとろくに、丈ばかりきて、常人をものくくせさて、草筵を、常人にあたをかけて、ほよい板をけて、置つれば、ごろつやせとして、又先よ立ちのぬ。ひて、門おーひらかんとするに、鍵さしてあり。金剛ちーなるかなつ鉄技をとりてうちたくく、此音をめちらして、門のうへなる家の篇おき出て、家より覗うれば、ものやーきりの、皮籠をさげて、出るより、盗人まとをしなりして、指手木をとりてうちつれば、奥のうさにてもおれをあつせて、指手木うちくちづく、金剛門の戸おーあけて、さんどつくく逃すよて、島のとぶやうにちーと出て、ひぬ老人はかりき羊

竹籠ハ負つ。不案内でハあり。板橋かけたる所ハいづくなるらんとし
すかし見れど。如法闇夜のことなりければ。あやめもわかず
せられて足も定まらず。ひさぢくとして。堀の中へずぶりと落ち
入ぬ。家の内にハ数十人の若とのども走り出て。松ともして
のくまなるがそこよりきて。ぬすびとハ堀に落たり。引出せとて
てんでんでに持きたりて。声を出して引あげつ。や
がてひきよりて。そびらに立る柳の樹にしばりつけつ。一定
あらされぬべし。ちでもせんかたなきぬすびとよとてさゞめきあへれ
事よと。後悔して。おめ〳〵としばられてゐるに。わざとしおぼしき
翁いできて。つく〴〵見て。やつがぬすびとハ臆めるやうなり。
かをどとりくへせしらへハ。そなちて柳ひやれしとやう。若りのさゞも。

いらでぬすびとをとらへて。たゞすべき道理もなく。夜あけぞ
ふしづけにして底なる川にしづめてんなどいふ。いよ〳〵
心よわりて。頭をたれてあるに。番せるものどもも。饑にそ〳〵やなど
はやきて膝をもちなほしかねてをれば。いかなるにしたがひ死
の驚きでのどうにあゆみくる人あり。男ども頭をもさげぞ
をれば老人ありひらるハしれハ此所の長なるとや。我を殺し
うりきたるなるべしとつかとしてるひてをるに此人ぢつく
ま分りて紙燭をりてつく〴〵ち守り見るも目もわそせず。
うつむきゐるに此人声をあげて。おのれハ常人にていましく
うしけ翁なるて見なげれし叔父なりけるなり。橋の安世なり。
わざとがつうらびて声あげてたゞけるまへにくとりし。安世ぶらく

しにしきあて出るハ。おのれうづきなきまゝに。盗賊り
そうろうなるべし。とはうるあへりのよ思ひをりしに。
我まかこゝ違ハざりけりといへど。おろじの翁来りきてさて
も甥のとのふくおそしけるや。ありゆかうせぬ事とてもかい
どいうしゆとていそぎ縄とうせて。泥よまみれし衣きせうく
はせなどするを。安世制して。さる志のひそかれめハうかれつき
不當のやつなりけれバ。いきおくべき者ならびいはおのれが思ひ
よりやと云てかうむ。安世が妻もきゝてありて。まづひきそひさす
ら安世をかへさせて。ともなひて入ぬ。おろじの翁常人をいざ
なひて。庇につれゆき。飯などくハせ。湯ひかせなどして。なぐさ
めけるに。安世がいひ常人をゆるすなどていひけるハ。おのれいけ

おくべきものならねど。人々のなぐさみ物となりて。我いかり
そのむくいとて。なかく勘當して。おひはなちやりし。今ぞ心をそそげ
悔し。行ひをあらため。人ならんには。ふたゝび對面する期も有べし
けるが。叔姪のちなみもあるなりとし思へといひすてゝ。障子
ひきたてゝ入ぬ。翁常人にむかひて。叔父君のおほせのおもむき
道理あり。此後心をあらためて。御勘當ゆりんやうに
もてなしたまへといひきかせ。常人ハ。べし〳〵として有けり
けるが。暫ありて頭をあげて。人々のおぼしめさん所もはづかしく
覚てはべれども。あらぬ事ども仕つりし。叔父君のおいかり
くるしきを知りて。今ハ夢のさめつる心ちして
此後はふたゝびかゝる事をなさじ。ひとへに心をそげなし

行ひをあらためんず。といへ。さて八本心よりおこりてやむゑん
うれしき事なりなど。翁もよろこびて。そゞろに涙ぐむ。母も
妻袋につゝみたるこがねを持出て。常人が前にすゝめけれバ。あ
もて世のならハしとすべき料とやしたまへ。あらためたらんには
薗生もいかにゆくゑをしらず。ちからをそへ其の中にも
られて育るべし。此身こそ女すてゝかれをつくのひわし。さび
はさぎもありなん。安世どのゝ[illegible]取りたまへくもられし
事ハ[illegible]しるよしもわかれど。さて八此身の勘當もゆる
されべき事なきならば。わすれずしてはらびやむが一家
うちそろひて。ふたゝびめでたく本の道に帰りすむべし。たゞ八
穴をうがちて入墓をもよもぬすまんとも見さとりあるべき道理

ぬれど。こにハよ此身の行ひよりてゆくすゑもやすらかなるべし。
といへバ翁もうれしさに思ひつりなげし。薗生の其の所へ[illegible]
ほせたまひて。かてに翁とりもちて此かくじハゆるさせ
なりんやうにはからひ給ふべしといへバ。常人うなづきてとにもかくにも
叔父君の此まへよきにつくろひなるべし。薗生どのゝ事ハ。
命にかけてとりかへし参らすべしとて。こがねを取てふところにおし
入明るれなば人もぞ見るなれバと夜のうちかせんと。立あがりて
出て行けり。道すがらおもひけるハ此こがね百両がありもあるべし。
いかで薗生を尋ねいだし。いかゞせひとへて我妻となしのぞり
乃夫がもとをすてゝ。かのつまの方へしのびやかなどし。父も横[illegible]
心をおこしてひとりゑゝしてあゆみける。凡道のほど二里ばかり

つねんごんぐ
ぎょ人金剛
じゅう命と共よ
えのびへて
ゝゝられ
やすよ
安世よ逢
て命ゝす
けゝまと逃げ
ゆく末

近江系幻語卷二

きこりねしかりけるが志げりたる森の中にて常人ことゝよ
聲に入てこれぞ金剛二郎がのかたごをかたはらに置て打やす
みてをりたるひま無事をよろこびて扱いそぎ此皮籠をうばひ
取りもて来りしといへど汝をそりて責さいなむ間皮籠を
も庭のかたへおわしをきまぎれ入てぬすまつるべかたりける
ままぎれたるまきぬいひとくいひかくしとりて身の毛さへよだち
ておそろしかりけるさて皮籠のふたひらきて見るにいかき鎧
一領そのほかさまざまの財ども多く入れてあり常人いひけるは
この鎧は我叔父の先祖よりつたへたる物にて殊に大事にせる
物なりけるをたとゑとりえたりといふそれより皮籠をたづさへ
人に負はせそこを出て四五町あゆみ行けるに金剛かり

かへりて常人をつくづくと見ておのれがふところのおもげなり
見ゆるぞこゝにねむりもてきたるはやとりよいでさやうの物
もちてはなきんかからうじて命ひろひしつゝ帰りは物をとり
いへど金剛することを大きにかしておのれ金剛ほどのものを
たぶらかさんとするはや人のふところは物のありなし
をはかりもるでねんびんのなりわひいできかんやとくく出して
見せよといふにふところをさぐりてこがねつゝみたる袋
とり出しぬれどもあとをとりて語りきかせけれど耳にもいれで
こぶしもて常人がかうべをつよくうちておのれ何事に
かくさうとするかやさしきならばこのこがねはおのれはやる
ぬぞそておのがふところへおしいれさらばとくあゆめと道を

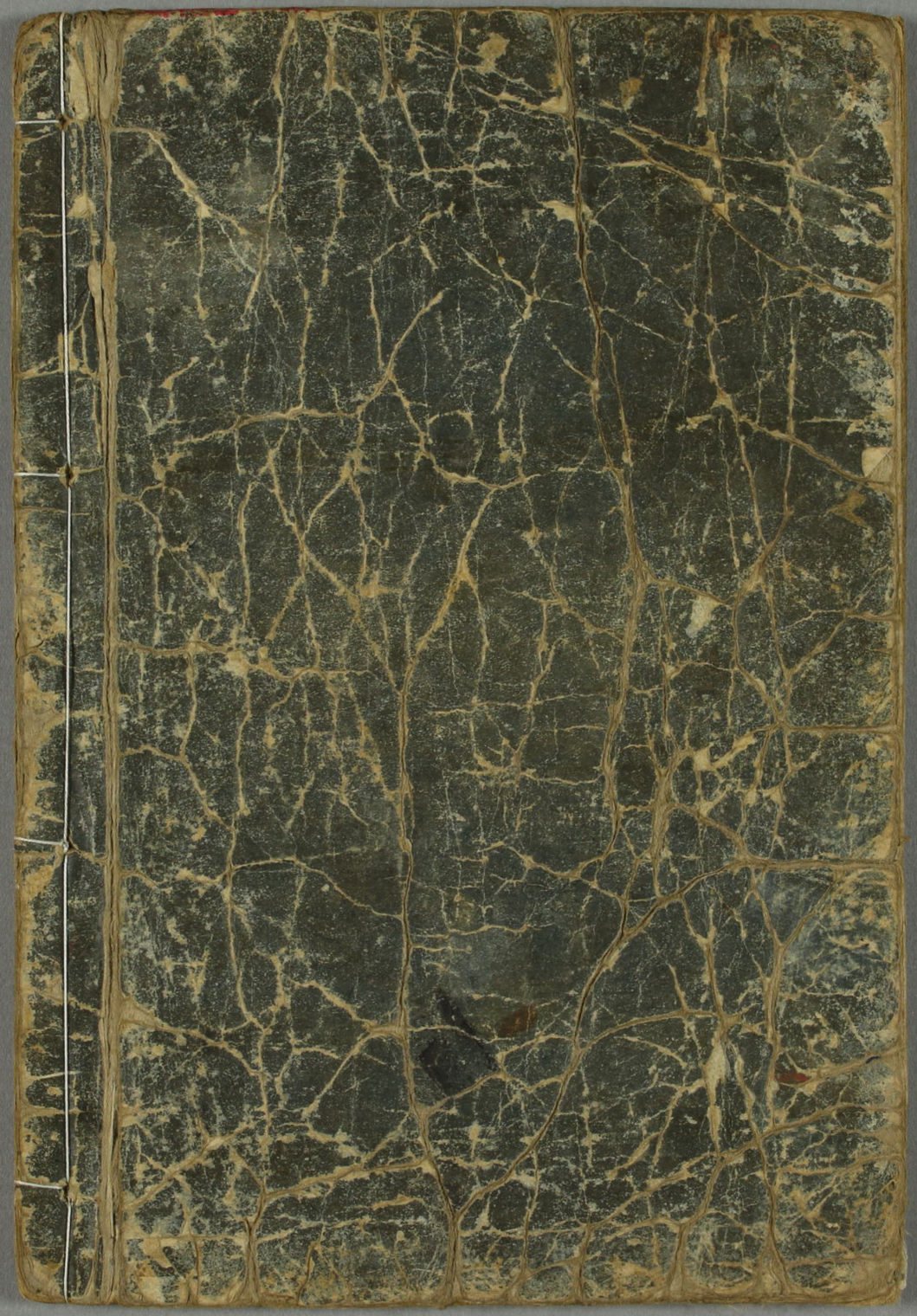
いそぎてたち行る。扨陣よつきて常人心ありひろ
ぬひびくいと物はきくにまたりておそろしき物こゝ
まてらかゝきめ見せて。たゝかはおのれひとりまてとりつかる
所は長ねせんはもやくも神路よは数のさうもも埋め置
うりと。叔母なる人のてきかゝこに行て堀あつてのち
りかく我物はせなや但ゝ皮籠は入て奪ひきゝ叔父人
の鎧はかゝ物よはあらじかれぬすて出てゆくやゝ
思ひて。やとくだりてねるよ金剛はさうにかつゝず調伏丸
ぶりと行て夜ふるとこ滝のもわてゆりこずゝ見ひり
そと思ひてふねひびくゝが眠りをゝ出さいをひよ皮籠ま
ひゝきて鎧とり出ゝ色は入ゝ脊は負ひて跡をも見

ずしてたち行る。凡三里だうきたりるが息きして術
なりしばらゝいこそんとてそこ見まわせど変などつゝ
置るあせぐ穀倉なり戸さしもなければ引明てかくの方は
入て。ねゝくだひてねゝり子の刺新あやし思ふ所あも
てに人のなゝしあとひゝ。ひれを追きたるあやしかゝ陸の
くゝきかゝにそひて聞きあるにさはなくて男女手ひき
あひて入来り。これはいあるにすゝる山賊の子の親など
乃めを忍びてひそうにかゝふんとてつれざらて来ゝ
ろり入くちの方は星あるにていさうあぎやうり常く
めをつけて見せバ我よはやとりたるゝあくき影のこと
衣きてをり女もむくつけひゝあやる顔にゆ何ふあ

らんぐつに盛る物。手にとりあひて女あいだれしたる事あり
しそけぬし。我を思ふこゝろふかくハなど男あり冥加鎮守の
神をうけてかへりハせじ。松山は波うちて。ほら貝の天上
すなとてもわぬしをおきて外ところんやこれと云べけぬ
しのてつら織ておこしつる布とふんどしとあらして。才をとる
おもふきてとりかどいへ常人をうしろを念じてゆかね
けるが。われも物のほしかりけれバ。やをちそこひかけてかれが
もち手のくつのたしをおよびて。ひきよせて見れバいもが
しるしをゆでてもてきたる者なりけり。男も女もかゝる物いひ
かけて口びるをうごかしければ。これをきゝ。常人がいと
くらふ木との。高くきこへけれバ。男んづきて。けふは。嵐

何なりといふに。常人。鼠なきをきて見すれバ。さハ鼠なり。
もてきたる物が何ならんとて手をやりてさぐりみる
はなかりければ。いもがしらハいかなる事ぞ。さてハわぬし
をやらひつくしたるにこそといふに。女いろごん籠に入て数
二十ゆでてもてきつるなりおのれこそ七つ食ひつといふ。男
けれハ三つこそくひつれ。さて八十なりけり。鼠のなりていはれなし。
くびつをさへられて。いはるゝハなまくの鼠にハあらじといふ。
はて二人ともに。帯をとき。おのそがよかの時。狐臭
みや。あやしき匂ひのそこらにちりて。顔にふきつく
なやうなれバ。常人たまらず。あなくさといへば。女も男も
おどろきて。おやしのへつくといひつゝ脱ける衣をとりて。

処出るものゝ心ろびとゝ見れば、あやまち死をとゝ（後）ほしの
うくにく、たくはうくはうとつ、足をそらにかゝしてそゝりの
出行る。老人ゆもつぶ、数ゝもあげつゝひて、さて鎧
うきいづれて、神祠をさしてそいそぎるかゝとゝ至りて
見るに、さいそひよ数ハりのまにく、さてあり、ふあてよ堀
うづもれて見れば、安のごとく、財どもあまゝあり。それゝり
くづもする所のじ、修理しつくろひて、おのれ家あるゝと
歓てずゆひりさるにても、伊賀の國なる、安世が帰り来れば、
もづうかりぬべうれでいるあり、て安世をとゝしりそゝやと
思ひて、なつぶれりものをかゝらひて、伊賀の國へつゝもつる
す。安世ハ妻をのゝていづゝへ出りるとゝ年ゝ。

帰り来て、そのゝしを告ゝれば、常人ありひるハ、今かく
盗賊どもをびとりする世よ。安世いとゝ武術よ練じれ
どとて、まちやゝく通ゆきゝんや、さゞめて、盗人よ
あらされぬべし。これハ我ゝあよらゝきゝそひとと
てひとりゝもびてぞゝくしわをり来れ。

近江縣物語卷之三終